

症例報告

Olanzapine低容量で不穏になり、増量することにより良好な結果がえられた統合失調症の1例

小林 一 弘* 荻 久 保 典 子*

はじめに

近年、わが国でも risperidone、quetiapine、olanzapine、perospirone といった非定型抗精神病薬が発売され治療の選択の幅が広がってきている。これらの非定型抗精神病薬が治療に用いられるようになり、EPSは軽減され、患者のQOLの向上に役立っている。今回は、olanzapine 5mgで不穏になり、20mgに増量することにより良好な結果がえられた統合失調症の1例を体験したので報告する。

症 例

症例：54歳 男性 統合失調症 精神遅滞
遺伝的因：父親がうつ病の診断で自殺企図、母親は自殺（詳細不明）

生活歴および既往歴：5人同胞の第4子。小、中学校成績は最下位に近く、中学校を卒業した後、放浪の身となった。

26歳、金沢市内で支離滅裂状態となり、A病院に措置入院した。その後、千葉県に兄がいることが分かり、措置解除。一旦は千葉の兄宅に居候したが、また放浪にでて、長期間行方不明になった。その後、交通事故にあい、B病院に入院、女性看護師のスカートをのぞいたり、性器をだしたりするため、身体的回復をまって当院に転院した。

治療過程：被害的な幻聴、関係妄想が活発で接枝分裂病の疑いで入院加療になった。当院では長年にわたり、haloperidolとlevomepromazineやhalop-

eridolとpropericyazineの組み合わせで加療されていた。筆者が主治医になった49歳の処方、haloperidol 9mg、propericyazine 150mg/3×だった。日中の眠気が強く、幻聴・被害妄想は活発で性器をだしたりするような行為も度々みられた。53歳時、尿閉になった。導尿とterazosin hydrochloride 3mg、distigmine bromide 30mg/3×を投与したことによって改善された。これを契機に、propericyazineを減量、中止にし、major tranquilizerは、haloperidol 9mg/3×だけにした。また、精査のために受診した泌尿器科の診断は神経因性膀胱で、前記した薬剤継続の指示がだされた。幻聴・被害妄想が活発なため、投薬内容をhaloperidolから、順次risperidone（以下RIS）に変更しRIS 6mg/3×とした。排尿には問題はなくなったがその後も、幻聴・被害妄想が持続するため12mgまで増量したが明らかな変化はなかった。また、1回/月程度で不安が高まり声を荒げたり暴れたりすることがあるため、olanzapine（以下OZP）5mgに変更していった。その後、徘徊が著明になり、汗をかきながら病棟を歩きまわるようになった。しかし、OZP 20mg/4×とすることで、すみやかに落ち着きをとるもどし、行動にもまとまりがみられるようになった。また、幻覚、妄想は次第に背景化していった。現在の処方、OZP 20mgだけで、幻覚・妄想は消退し、性的行為もみられなくなり精神状態は安定している。また、ホールに出てくることも多くなった。ただ、ほとんど対人交流はみとめられない。terazosin hydrochloride 3mg、distigmine bromide 30mgは中止できた。

* 岩屋病院精神医学（こばやし かずひろ）

* 同上（おぎくぼ のりこ）

考 察

OZPは多くの二重盲検がなされており、haloperidolに対して同等の陽性症状へと、有意に高い陰性症状への効果が報告されている^{3,4)}。しかし、今までは陰性症状の改善から賦活効果が注目され、鎮静効果はなおざりにされてきた印象がある。今回われわれは、幻聴・被害妄想が持続していたが、陽性症状の改善と鎮静効果がOZPでえられた症例を経験した。症例はRISを12mgまで増量したが、効果は乏しかった。そのため、RISを減量中止しながらOZP 5mgを開始した。しかし、徘徊、焦燥などがみられるようになり、OZPを中止するか、増量して鎮静を期待するかの選択にせまられた。Anne Bille¹⁾は、1997年以来の医学文献のレビューによれば、攻撃、興奮に話し合いの結果、OZPを20mgまで増量すると鎮静が得られ精神症状に効果的だった試験²⁾があると述べている。今回は、①鎮静がえられる量まで増量するか、②他剤に変更するか、③鎮静系の薬剤を併用するか考えた末、われわれも鎮静を期待し、OZP 20mgとした。その結果、十分な鎮静がえられ、幻覚・妄想も次第に背景化して、性器を出すような問題行為もみられなくなった。

その後の経過も順調である。これまで、OZPは、鎮静力が弱く、賦活作用が強いとされてきた。

今回の症例はOZP 5mgでは不穏となったが、20mgへの増量で陽性症状とともに陰性症状効果があつた。このような症例はめずらしいと思い報告した。

まとめ

今回は、OZP 5mgで焦燥感、徘徊などが賦活され、多剤への変更も考慮された。しかし、20mgに増量することで鎮静と、幻覚・妄想の改善効果がえられた。今回、発表したような症例も存在することは、これからの臨床で、OZPの見かたが変わっていくかもしれない。

〔文 献〕

- 1) Anne Bille : 良好な錐体外路症状 (EPS) の安全性プロファイルをもつ優れた非定型抗精神病薬 ; 臨床精神薬理 4 : 913-918, 2001.
- 2) Bana, N., Foster, R.H., R. et al : An updated review of its use in the management of schizophrenia. Drugs, jan ; 61, 2001.
- 3) Leucht S, Pitschel-Walz G, Abraham D, et al : Efficacy and extrapyramidal side - of the new antipsychotic olanzapine, quetiapine risperidone and seltindole compared to conventional antipsychotics and placebo : A meta - analysis of randomized controlled trials. Schzophr Res 35 : 51-68, 2000.
- 4) Worrl JR, Marken PA, Beckman SE, et al Atypical antipsychotic agents : A critical review. Am J Health Syst Pharm 57 : 23-258, 2000.